銀賞

『命の花』

命の花

東京都　共立女子高等学校二年　星野明希

ぼくは六歳。兄ちゃんと、二人きりで暮らしている。父ちゃんは、ぼくが生まれる前に、死んでしまって、母ちゃんはぼくが生まれてすぐに病気になった。ぼくの家は山の中だから、兄ちゃんがどれだけ走っても、お医者さんを呼ぶのには時間がかかった。それで母ちゃんは死んでしまった。兄ちゃんは十五歳、ぼくはまだ三歳だった。

短い草がたくさん生えた庭と、家を囲む森の木々、森を少し進むと、大きな池がある。ぼくが遊ぶには十分な家だ。家の後ろには小麦畑と、父ちゃんと母ちゃんのお墓が並んでいるが、ぼくはほとんどそこには行かない。兄ちゃんはいつも家の横に立つ東屋で小麦を石臼で挽いていて、その小麦粉を背負って二週間に一度、街に降りてそれを売る。その日は朝早くに兄ちゃんは家を出て、星が綺麗に見える頃に帰ってくる。

ある日のことだった。ぼくが木の枝にぶら下がっていると、それは急に折れてしまった。膝が擦りむけて真っ赤に滲んだ。ぼくが泣いていると、兄ちゃんは森に出てきてくれた。東屋にぼくの声が届いたのだろう。ぼくの手を引く兄ちゃんの手は白かったから、小麦を挽く手を止めてきてくれたんだと思った。兄ちゃんに連れられて家の中に入ると、兄ちゃんはぼくの膝を冷たい水で洗い流して、千切った布を巻きつけてくれた。水は足に染み込んでぼくは泣き声を大きくしたが、兄ちゃんはやめてはくれなかった。ぼくは知ってる。兄ちゃんは怪我や病気に敏感だ。サイキンが入らないように、と口癖のように言う。それでもぼくは外を走り回るのが大好きで、い

つも全身を泥だらけにしては兄ちゃんを困らせている。
「それ、どうしたんだ？　拾ったのか？」
兄ちゃんはぼくが握っている小枝に目を移した。
「ううん、ぶら下がってたら折れちゃったんだ」
ぼくは正直に話した。すると兄ちゃんは、じゃあサシキをやらなきゃな、とぼくの手を引いて外へ出た。庭の真ん中の地面に穴を掘って、小枝を植える。
「これでこの小枝は生き返る」
兄ちゃんは満足げに言った。ぼくにはいまいちよくわからなかったけれど、兄ちゃんが嬉しそうならそれでいいやと思った。
兄ちゃんの言葉の意味がわかったのは、それから間もなく経った頃だった。植えた小枝から新しい葉が生えていたのだ。ぼくは嬉しくなって、枝の周りを跳ね回った。兄ちゃんは、正しい処置をすれば、無事元に戻ると言った。
それから数日後、ぼくが森の中を歩き回っていると、鳥が立っていた。ぼくはいつものように追い回そうとその鳥に近づいて行った。しかし鳥はいつものように飛び立ったり、走って逃げたりはしない。じっと止まって、首だけをぼくに向けた。真っ赤な目だった。灰色の羽毛の中で、それは光って見えた。ぼくは怖くなって、少し鳥から離れた。鳥はぼくには興味もなさそうに、首も向きを戻して、どこか遠くを見ている。その時気がついた。その鳥は片足だった。血も垂れていないから、ずっと前に取れてしまったのかもしれない。ぼくはいっそう怖くなって、走って逃げ出した。それから兄ちゃんにそのことを話した。すると兄ちゃんは森の中に入っていっ

て、そしてさっきの鳥を抱えて帰ってきた。ぼくは怖くて、小麦の入った袋の後ろにしゃがみ込んだ。兄ちゃんは、すっかり緑の葉が生えた小枝の木のそばに穴を掘って、その鳥を入れた。兄ちゃんはそっと土を被せて家の中へ戻っていった。ぼくは土が膨らんだところにそっと近づいた。ここにはさっきの鳥がいる。ぼくは笑顔で森の中へ遊びに戻った。

片足の鳥と出会って一週間以上経った。ぼくは土を見つめていたが、痺れを切らしてその土を掘った。穴は思ったより深く掘られていて、鳥を見つけるのには長くかかった。ようやく、土色じゃないものを見つけてぼくは懸命に土を払った。そこにいた鳥は最初よりずっと醜く、怖かった。ぼくは驚いて大声で泣きながら兄ちゃんのところへ逃げた。兄ちゃんは土まみれのぼくをお風呂に入れて、それから話を聞いてくれた。ぼくはしゃくりながら兄ちゃんに訴えた。

「と、鳥がね、い、いきかえ、らなくて、ね」

兄ちゃんはぼくの顔を優しく撫でていたが、急にそれをやめて外に駆け出した。それからしばらくぼくはポカンと兄ちゃんの跡を見つめていた。

帰ってきた兄ちゃんは手を土色にしていて、怒った顔をしていた。

「なんで掘り返したりなんてしたんだ!!」

ぼくを見るなり兄ちゃんはぼくを怒鳴りつけた。ぼくはもっと悲しくなって、声をあげて泣いた。

「だって、ちゃんと、すれば、生き返る、って」

もう涙で兄ちゃんの顔も見れなかった。怒った顔だけが目の向こうに張り付いている。水が流れる音がして兄ちゃんはぼくを抱きしめた。

「……ごめんな。俺の言い方が悪かった。生き物は生き返らない。墓を掘り起こすのは悪者がすることだ。天へと向かっているものを起こしてはいけない。もう二度としないと約束してくれ」

ぼくは何度も頷いた。兄ちゃんの声はいつもの優しい声よりちょっと低かったけど、ぼくはただ頷き続けた。

次の日、ぼくは森の中で折れた一輪の花を見つけた。それは赤色の大きな花びらが五枚ついていて、真ん中は黄色の花粉がキラキラしていた。見たことがない花だったけど、とても美しい花だ。大きな木は森の中を日陰にしてくれるのに、そこだけが輝いて見えた。ぼくは、その折れた花を持って庭へ戻った。そして片足鳥のお墓の横に植えた。植物は生き返ると知っていたからだ。水をあげて一夜経つと、その花は綺麗に咲き誇っていた。ぼくは満足して、家の中で過ごした。空は曇っていて、そのうち雨が降ると思ったからだ。雨はすぐに降り始めた。今日は兄ちゃんが街で小麦を売っているからぼくは家で一人きりだった。兄ちゃんの代わりに、家中の埃を箒で集めたり、雑巾で磨いたり、お風呂もピカピカにした。

兄ちゃんが帰って来た頃には雨はすっかり止んでいた。ぼくがいつもの通り玄関で出迎えると、兄ちゃんは顔を顰めていた。

「お前、またやったのか?」

兄ちゃんの声はすごく怒っていた。兄ちゃんはぼくのことを「お前」だなんて言わない。きっと凄く怒っているけれど、何に怒っているのかさっぱりわからなかった。

「なんのこと?」

ぼくはそう尋ねるしかなかった。兄ちゃんは顔を歪ませる。

「また墓を掘り返したのか?」

全く身に覚えがなかった。兄ちゃんに駄目と言われたことを繰り返したりしない。そう言いたかったけど、怖くて鼻がツンとして、首を一生懸命に振った。兄ちゃんはぼくに靴を履かせて、一緒に家を出た。片足鳥の墓にぽっかり穴が空いていて、それを覗き込んでも、鳥はいなかった。ぼくは兄ちゃんを見上げて首を振った。兄ちゃんは怪訝そうにぼくを見つめたが、もうこのことには触れなかった。静かな夕食が終わってぼくは眠りについた。

鳥が立っている。灰色の羽毛に埋もれた真っ赤な目。じっと空を見つめている。

「君はどこにいるの?」

鳥はぼくの方をちらりと見ると、再び空に視線を戻した。それから鳥はぼくの問いかけに答えてくれはしなかった。

起きてすぐに、ぼくは森の中を駆けた。そして、一羽の鳥を見つけた。あの日の鳥だった。夢で見た鳥だった。しかし一つだけ違った。その鳥は空ではなくぼくをじっと見つめていた。そして、そのまま空に飛び立った。相変わらず片足だったが、その鳥は大空に羽ばたいていった。ぼくは確信した。あの鳥は生き返ったのだ。

ぼくは庭のお墓の元へと戻った。穴は埋められていた。多分兄ちゃんがそうしたんだと思った。ぼくはお墓の周りを観察した。特に変わったことはない。ふと視線を動かすと、赤い花の輝きが増して見えた。そういえばこの花を植えたのは一昨日のことだ。試してみよう。ぼくは森の中へ駆け出した。

森を少し抜けたところにある池のほとりで、ぼくは早速カエルを見つけた。その体は紫色で、草に張り付いたままになっている。ぼくは勇気を振り絞ってそれを掴むと、一目散に家へと帰り、赤い花の隣に埋めた。

次の日、カエルのお墓はやっぱり穴が空いていて、空っぽだった。ぼくは兄ちゃんに教えてあげようと、今度

は東屋に向かった。兄ちゃんはいつものように収穫した小麦を粉にしていた。
「ぼくわかったんだ！」
不思議そうな顔の兄ちゃんの腕を引いて、ぼくは赤い花の前まで連れていった。森で花を見つけて植えたこと、鳥を再び見つけたこと、カエルもいなくなったこと、ぼくは興奮しながら兄ちゃんに言って聞かせた。兄ちゃんはまだ信じられなさそうだったが、ぼくの言葉を受け入れてくれた。
それから庭には時々動物たちのお墓が並ぶようになった。兄ちゃんは植物の棘が刺さった動物の棘を抜いて、少し綺麗に洗ってやってから花の横に埋めた。次の日には穴は空になっていた。するとぼくは森の中で元気に生きている動物を見ることができた。ぼくは嬉しくなった。
また兄ちゃんは街へ行った。ぼくは家で一人きり、花の周りを眺めていた。今は動物のお墓はない。一昨日、木から落ちてしまっていたリスが昨日いなくなったきりだ。ぼくは花をじっと見た。赤い花びらも花粉もキラキラしていた。艶々とした大きく滑らかな赤い花びらを眺めているうちに、ぼくはあることに気がついた。
土を少しずつ掘って、花を根っこごと抜くと、ぼくは家の反対側へ向かった。そこには父ちゃんと母ちゃんのお墓がある。ぼくは母ちゃんのお墓の横に赤い花を植え直して、水をたっぷりかけてやった。それから家事を済ませると、森に入って一日中遊びまわった。お風呂からあがって兄ちゃんを待っているうちにぼくは眠くなって、布団にも行かずに眠ってしまった。
赤い花が咲き誇っている。大輪を空に向けて、キラキラと輝いている。その花びらは、少しずつ色を濃くしていたが、しばらくすると、中央から白っぽくなっていった。
起きると、ぼくは布団の中にいた。兄ちゃんが運んでくれたのだろう。ぼくは急いで靴を履いて、家の裏側へ

走った。
「なんで？」
そこに赤い花はなかった。今度は東屋へ走る。兄ちゃんはそこで手を真っ白にしていた。
「おはよう」
いつものように挨拶をする兄ちゃんに、ぼくは花がなくなったことを話した。
「なくなったのか？　裏のお墓の土と、相性が悪かったんじゃないのか？」
ぼくは兄ちゃんを見上げる。
「ぼくは、裏のお墓に植え替えたなんて言ってないよ？」
兄ちゃんの顔が強張った。
「兄ちゃんが抜いたんだ！　兄ちゃんが！　ぼくの花をなんでそんなことしたんだよ!!」
ぼくは兄ちゃんの腕を殴った。視界がぼやけていたが、その手は止めなかった。兄ちゃんは抵抗もせずに殴られるものだから、それがもっと憎らしくてぼくは殴る力を強くした。
「あの花は、俺たちのものじゃない」
ようやく聞いた兄ちゃんの声は落ち着きはらっていて、ぼくは思わずその手を止めた。兄ちゃんの手がぼくの顔を拭う。
「俺も、惨く死んでしまった生き物を生き返らせるのはいいことなんじゃないかって思っていたんだ。でも昨日花がなくなっていたときにすぐに気がついた。俺も、少し思っていたんだ、同じことを。そしてわかった。これは駄目なことなんだと。生命は神様が与えてくれるもの。それを俺たち人間がどうこうしちゃいけない」

兄ちゃんの顔は苦しそうだった。
「駄目なんだ。お前もわかるだろう?」
ぼくは兄ちゃんの言葉をじっと聞いていた。そのうち涙が溢れてきて、再びぼくは声をあげて泣いた。兄ちゃんはぼくの背中をさすってくれた。途中ぼくの頭に何度か雫が落ちたけど、見上げた空は晴れ渡っていた。
ぼくが落ち着くと、兄ちゃんはぼくに顔を洗わせて、それから家の外へ連れ出した。兄ちゃんは東屋の中から大きく、そして赤い、あの花を持ってきた。
「この花を燃やそうと思う」
兄ちゃんはぼくに言った。兄ちゃんはやっぱり優しい。ぼくが寝ている間に燃やすこともできたのに、ぼくに言うために待っていてくれたんだ。ぼくは頷いた。兄ちゃんは花にマッチで火を放った。花はあっけなく燃えた。生物に命を与える魔法の花は、跡形もなく燃えさって、そこには輝く灰だけが残った。兄ちゃんはその灰を小枝の木に撒いた。
その夜、強い雨が降った。聞いたことのない水の跳ねる音が外で響いていた。
木が一本ある。陽に照らされて、水を吸収して、大きく、大きく空に向かって生えていく。
ぼくは窓から差し込む日の光で目が覚めた。それから靴を履いて、玄関の扉を開けた途端、ぼくは足を止めた。小枝だった木は、大きな木になっていた。森の木よりも頭ひとつ分大きい木だ。そしてそのそばに膨らんだ土がいくつもあった。そこには木の棒が立てられていて、「片足の鳥」とか「カエル」とか書いてあった。魔法の花がなくなってしまったから、命も元に戻ってしまったのかもしれない。立て札は兄ちゃんが書いたのだろう。大樹は、それらを休ませるように大きな陰を作っていた。気がつけば兄ちゃんがぼくの横にいて、手を合わ

せていた。ぼくもそうした。二人で長いことそうしていた。